

要旨

筆者の所属する理系研究室では、研究に関する記録管理の手法が多様化している。手法を画一化することは研究過程の思考の流れを妨げることにもつながるため、理系研究室の中でも、情報・解析系研究室では研究過程におけるデータの記録管理手法の画一化は行ってこなかった。

しかしながら、昨今、研究不正に端を発した研究過程におけるデータ開示が社会より求められている。加えて、オープンアクセスやオープンサイエンスなどの国際的な潮流があることから、適切な記録管理と一定の基準は、情報・解析系研究室においても必須である。そもそも、筆者の所属する研究室で検証する研究データは各リポジトリからの参照であり、当該データやリポジトリへの信憑性を前提にして研究を進めている(すべての実証データ結果を研究室単位で再検証することは不可能である)。オープンアクセス、オープンサイエンスの恩恵を受けている当事者として、信頼に値するデータを蓄積していくことは当然の責務である。

また、適切な記録管理を行うことで、セミナーの内容を多様化することができ、セミナー自体を活性化することも可能である。情報・解析系研究室では各自が研究に集中するあまり、日常のコミュニケーションも滞りがちである。研究者、学生がそれぞれどのような問題を抱えているかさえ、研究室内で共有できていない場合がある。こうした問題点も、適切な記録管理が下支えすることで解決に導くことが期待できる。

だが、大学の末端である一研究室が常時相談できる、記録管理について精通した専門職員は存在していない。また、研究室のスタッフや研究者であっても、適切な「評価選別」でさえできていないのが現状である。

本稿では、研究活動全般をサポートする立場の人間として、情報・解析系研究室における記録管理について論考し、研究室として解決できる点、記録管理専門官の意見を踏まえ解決すべき点について指摘する。また、情報・解析系研究室での「記録」とはなにか、オープンサイエンスを前提とした記録管理と研究室内の現状の齟齬についても考察する。さらに、情報・解析系研究室の視点から、どのような記録管理専門官を希望するかについても言及する。